

# ロシアの新教育とレフ・トルストイ

佐々木 弘 明

New Education in Russia and Leo Tolstoy

HIROAKI Sasaki\*

## I

19世紀の80年代後半から、教育の革新・改造を求めるさまざまな主張や各種の実践的試み、いわゆる新教育の運動が各国でくり広げられていく。

それは、一口で言えば、大人・教師から子どもへ、教育のいとなみの中心移動の要求であり、子どもを古い教育の桎梏から解放し、自発性・活動性に基づき、表現力・創造力を発揮させ、個性の開花・自己の確立を目的とした点で共通している。そしてそれは、工業化—機械化の急速な発展を基盤とした国際的経済—市場獲得競争期、すなわち帝国主義段階の時代的産物であった。

時代的には、生産力の発達、急速な科学および技術の進歩と関連して、国民大衆の一定の学力と創造性が必要とされ、また社会進歩に即応し社会をリードする層の人材の確保と開発が急務とされていたが、結果的には時代の要求に呼応する流れの中で新教育の運動が展開されていったことから、そのブルジョア的性格が指摘されることになる。他方で、産業化・物質文明化社会にともなう階級対立の激化、物質・機械への隷属化、人間の疎外化、不正や墮落などという社会矛盾や社会悪が一層助長されていく状況の中で、諸々の社会—政治的要求や革命的運動と並んで、失われつつある人間性を回復し、社会的矛盾の是正や社会悪の克服を人間関係・内面的人格形成に求め、教育による社会の革新・改造を理想とする解放思想や運動が展開されていった。ここに新教育のもうひとつの顔がある。新教育には時代的要求への適応と時代的矛盾の克服とが交錯している。

帝政期ロシアにおいても、農奴解放(1861年)以後資本主義的諸関係が急速に進展し、1890年代には工業生産量が飛躍的急増を示した。しかし、実際には依然として人口の8割を農民が占める農業国であり、農民の大半=貧農は農奴制下の賦役に類似した雇役制の下であえぎ、「90年代における急速な資本主義の発達も、このような雇役的農業構造によって低賃金の労働力を保障されたからこそ、はじめて可能であった」<sup>1)</sup>のである。こうして先進ヨーロッパとは異質な形で資本主義化が進められたところに、ロシアの後進性があ

\* 教育学教室 (Dept. of Education)

り、それだけにその社会的矛盾や人間疎外はより深刻となり、大産業家や大地主やギリシヤ正教会をバックとする専制国家への不満や反抗が激増し、社会の改革や変革を求めるさまざまな思想や運動が展開されていく。

ロシアの新教育は、いうまでもないが、こうした社会状況を色濃く反映している。ロシアにおける新教育の動きは、1880年から現われてくる。『哲学と心理学の諸問題』（《Вопросы философии и психологии》1889～1918）、『教育報知』（《Вестник Воспитания》1890～1918）、『ロシアの学校』（《Русская школа》1890～1917）、『教育』（《Образование》1892～1909）などの教育関係雑誌が創刊され、それらには、ゲー・チュルパーノフ（Г.И. Черпанов 1862～1936）、ヴェー・ベヒテレフ（В.М. Бехтерев 1857～1927）、ペー・カプテレフ（П.Х. Каптерев 1849～1922）、ペー・ミジュエフ（П.Г. Мижнев 1861～1932）、ヴェー・ヴァフテローフ（В.П. Вахтеров 1853～1924）、ヴェー・オストロゴルスキー（В.П. Острогорский 1840～1902）、ヴェー・シポフスキー（В.Д. Сиповский 1844～1895）等当時の先進的な教育学者や心理学者そして自由主義的インテリゲンツィヤが多数参画し、ロシアの国民教育や中等教育の現状に対する鋭い批判とともに、外国の新しい教育の理論や方法や実践、実験心理学に基づく児童研究などに基づく教育の新しい提言や試みが現われた。

ロシアで新教育が開花するのは、ブルジョア革命といわれる第一次ロシア革命（1905～1907年）の時期からである。この時期は、言論や出版や集会にたいする制限がかなり緩和され、比較的自由的な雰囲気の中で、34種もの新しい教育雑誌が発行され、各種教育団体やサークルが結成され、新学校や実験学校が設立されるなど、教育の革新を求める声が一段と高まった時であった。

ところで、新教育という言葉は、ソビエト教育学では、西ヨーロッパの新教育、それもC・レデーなどの新学校にたいしてもっぱら用いられており、ロシアでそれに相当するものには自由主義的ブルジョア教育という表現をしている。それは、第一次ロシア革命はブルジョアジーの専制国家にたいする譲歩と妥協の産物であり、自由主義的なブルジョア教育家やインテリゲンツィヤの多くが立憲民主党に走り、反革命的勢力となり、国民の教育的要求にこたえていかなかったという評価にある。上記の教育雑誌も第一次革命以後は自由主義的ブルジョア教育雑誌と評されていく。ソビエトの教育家ヴェー・ヴォルコフ（В.И. Волков）は次のように述べている。

「革命の時期に多くのブルジョア教育雑誌において、いわゆる『新』学校に非常に大きな注意が注がれた。それらは、ブルジョア教育家たちによって、当時の最も進歩的学校とみなされた。しかしきわめて注目すべき事は、これらの『新』学校が、御用教育家の機関雑誌『国民教育省誌』（《Журнал Министерства народного просвещения》1834～1917）において非常に積極的な評価を受けたということである（1905年1月）。『新学校にたいする自由主義的教育家と御用教育家との評価の一致は、それ自体がすべてを物語っており、説明を必要としない。従って、1905～1907年の第一次革命期の教育の理論と実践において、教育家—自由主義者たちは、いかなる創造的思考をも現わさず、そして保守主義と

反動主義の認識の中にとどまり続けた」<sup>2)</sup>

こうしたきめつけ的な評価がどこまで妥当であるかについては、上記の各雑誌を検討しなければならない。またロシアの新学校としては、1906年にロシアを訪問したレデイの影響下に、ペテルブルクの皇室領に設立されたものがあるといわれるが、その詳細について、また他の新学校については不明である。合せて今後の研究課題としたい。

さて、この時期、ブルジョア・インテリゲンツィヤよりも、はるかに痛烈に当時の教育政策や学校教育を批判し、終始子どもの解放と教育の自由を主張し、より積極的に教育の革新を迫り、その教育思想の普及と実践的活動に全力を傾注した、もうひとつのインテリゲンツィアの層があった。ラジカル・プチブル・インテリゲンツィア、ないしはプチブル民主主義的インテリゲンツィアと呼ばれる層である。そこには大学生や教師たちが多数加わり、その主導的役割を果たしたのがエス・シャツキー (С.Т. Шацкий 1878~1934)、カー・ヴェントツェリ (К.Н. Вентцель 1857~1947) であった。この二人をはじめプチブル・インテリゲンツィア層は、当時多かれ少なかれ、レフ・トルストイ (Л.Н. Толстой 1828~1910) の社会観や宗教観そして教育観の影響を受けており、革命によってではなく、教育—内面的人格形成をもとにした社会改革を理想とし、そして多くが雑誌『自由主義教育』(《Свободное Воспитание 1907~1918》<sup>3)</sup>) の参加者や購読者であった。この『自由主義教育』誌における思潮が、ロシアの新教育の中心にあった。

ソビエト教育学者エフ・オゼルスカヤ (Ф.С. Озерская) はつぎのように述べている。

「若い世代の知性の支配の闘争において、プチブル教育思想の流れのひとつ—『自由主義教育』が発達していった。それは、『子どもの人格にたいする限りなき尊敬』を要求した。このプチブル思想の代表者たちは、経済的および精神的隷属からの出口を革命闘争においてではなく、支配階級との妥協の中にさがし求めた。階級闘争を否定して、自由主義の支持者たちは、プチジョア社会の内部で新しい世代の教育を通じて現実を革新するという、ユートピア的理念をつくりあげた。官製の教育学と学校による迫害にたいする自己の抵抗を、彼らは教育における固陋<sup>ころう</sup>と形式主義との闘争に向けたのであった」<sup>4)</sup>

ここにみられる否定的評価は、教育観については、「教育の階級的目的の否定」、「社会と国家から子どもの解放」、「子どもの本性の理想化」、「子どもの個人的体験の過大評価」、「集団的教育の過少評価」、「教師の役割の過少評価」などの指摘にみられる。

それにもかかわらず、一方でこのプチブル・インテリゲンツィアの「自由主義教育」に歴史的意義を与える。「子どもにたいする人道的・博愛的態度」、「人格の尊重」、「子どもの自主性と活動性と創造性の発達」「労働的教育」が「ソビエトの学校の理論と実践の中で発達した」<sup>5)</sup>

この肯定的評価は、シャツキー、ア・ゼレンコ (А.У. Зеленко 1871~1953)、エヌ・チェーホフ (Н.В. Чехов 1865~1947)、イー・ゴルブーノフ-ポサードフ (И.И. Горбунов-Посадов 1864~1940) など自由主義教育者たちの多数が、十月社会主義大革命 (1917年) 後のソビエト政権下において、ナルコンプロス (教育人民委員部) で学校建設などに積極的に参画していったこと、そしてさらには『自由主義教育』誌が、政治的に寛容で、クル

ープスカヤ (H. K. Крупская 1869~1939) の教育論文を掲載した (全部で14編が掲載されている) こと, などが要因となっている。

後者について, クループスカヤは, 1920年この雑集の編集責任者ゴルブーノフ-ポサードフに次のように書いている。

「その誌面には, いろいろな立場の政治的見解が場所を見出した。カデートの『ロシアの学校』は, 他の教育雑誌はいうまでもないことであるが, 外国から送られた私の論文をことごとく組織的に拒否した。『自由主義教育』は, 送られたものすべてを印刷してくれた<sup>6)</sup>。それにたいして感謝の言葉もないほどである」<sup>7)</sup>

クループスカヤは, 上と同じ論文で, 「あなたがたによって出版された『自由主義教育』は大きな意義を有していた。旧い体制の時代に, 子どもの人格はことごとく抑圧され, まったく無視されていた。子どもの欲求, 心的過程, 興味の黙殺にたいする抗議の声は『自由主義教育』の各ページからゴォーと鳴り響いた」<sup>8)</sup>と書いているが, こうしたラジカルな反政治的態度は, 当然, 当局から強い介入を受けることになった。ゴルブーノフ-ポサードフは, 『自由主義教育』誌刊行10年を振り返って, 1918年に, 『この雑誌は, 教師を墮落させているとみなされた。この雑誌を購読している教師は, 当局にとって好ましからざる人物という烙印をおされた。教師にたいして, 雑誌の購読を中止するか, さもなければ退職するか, のいずれかをとるように要求してきた。この雑誌を宣伝したかどで, 教師が追放されるということがしばしば起った」<sup>9)</sup>と書いている。そしてゴルブーノフ-ポサードフ自身も, 17回にわたって裁判所に告訴され, その多くは元老院にまで持ち込まれたといわれる<sup>10)</sup>。

『自由主義教育』誌に参画したり, 購読したプチブル・インテリゲンツィア層の多くが, レフ・トルストイの影響を受けていたと述べたが, 1880年代以降のトルストイについて若干説明をしておこう。

『戦争と平和』(1863~1869), 『アンナ・カレーニナ』(1873~1877) などですでに内外で作家の地位を不動のものとしていたレフ・トルストイは, 1870年代の末の有名な転回の後, 彼自身によれば「神と人類への奉仕に専念」し, 晩年まで社会奉仕・救済活動, 宗教・道徳的活動などに全身全霊を打ち込み, その影響力はロシアのみならず, 世界中に及び, 文豪として同時に人道主義者・平和主義者としてその名が永久不滅のものとなっていることは周知の通りである。

1880年以降の主な著作を挙げてみるだけで, トルストイの転回後の歩みが一目瞭然である。『懺悔』(1879~1882), 『教義神学批判』(1880), 『要約福音書』(1881), 『さらばわれらなにをなすべきか』(1882~1886), 『わが信仰はいずれにありや』(1884), 小説『イワン・イリッチの死』(1886), 『人生論』(1886), 戯曲『闇の力』(1886), 喜劇『文明の果実』(1886~1890), 小説『クロイツェル・ソナタ』(1887~1889), 小説『復活』(1889~1899), 『神の王国は汝等のうちにあり』, (1891~1893)『最初の段階』(1891), 小説『主人と下男』(1895), 『芸術とは何か』(1896~1897), 戯曲『生ける屍』(1900), 『唯一の手段』(1901), 『一日一善』(1904~1906), 『世の終り』(1905), 『黙ます能わず』(1908),

『避け難き大変革』(1908)、『人生の道』(遺稿)、そして数多くの民話や読本。

トルストイは、これらの著作で、専制国家とギリシャ正教会を痛烈に攻撃し、ロシアの社会悪と道徳的頹廢を仮借なくあばき出し、国民への奉仕と教化を呼びかけ、新約聖書マタイ伝の山上の垂訓を一切の道德律として「内面的自己完成」と「悪にたいする無抵抗」を根幹とするトルストイ主義(国家と教会を否定し、地上に神の国を建設することを理想としたことからキリスト教的無政府主義<sup>アナキズム</sup>と呼ばれる)を説いた。極めて危険な人物として彼の身边はつねに官憲の監視下におかれ、多数のトルストイ信奉者が流刑や処罰され、彼の著作の多くは発禁や削除されたが、それらは写本やこんにゃく版によってロシア中に普及し、また各国で翻訳され、彼の言動がロシア社会や反政府的活動に与えた影響は絶大で、彼を処罰しようとした専制政府は、彼の世界的名声をはばかって彼には手だしをしえなかった。

レーニンが1908年に書いた『ロシア革命の鏡としてのトルストイ』が、ソビエトのトルストイ評価の基本となっているが、比較的最近のものには、「19世紀末～20世紀初めのトルストイの多くの社会的、文学的発言は、現存体制を『ゆさぶった』。その中では、帝政ロシアの経済的、政治的土台および他の資本主義的側面にたいする容赦のない批判が、自己完成と無抵抗による人間救済の空想的処方箋と、奇妙にからみあっている」<sup>11)</sup>とされている。

シャツキーは、『懺悔』や『さらばわれらなにをなすべきか』や教育的著作を通して、「トルストイの思想に深甚な影響を受け」、「自由教育理論に基づいたトルストイのヤースナヤ・ポリヤーナ学校は、シャツキーの中に理想的な学校の原型として、一つの目指すべきイメージを形づくった」<sup>12)</sup>といわれ、ヴェントツェリは、トルストイの思想をもとに道德観を形成し<sup>13)</sup>、ゴルブーノフ-ポサードフは、『要約福音書』に共感し、「心からの、忠実な信奉者」として、生涯トルストイの活動の助力者、思想の伝播者となった<sup>14)</sup>。

『自由主義教育』誌は、トルストイ信奉者ゴルブーノフ-ポサードフによって出版されたこともあって、トルストイ自身が寄せた論文も含め、トルストイに直接関するものが大小合せて20数編におよんでいる。それだけに、この雑誌を通して、ロシアの新教育に及ぼしたトルストイの影響は大きかったといえる。

以下、『自由主義教育誌』を中心に、ロシアの新教育とトルストイについて論じていくことにする。

## II

『自由主義教育』誌について論ずるまえに、「仲介者」(《Посредник》)社とゴルブーノフ-ポサードフの出版活動を見ておく必要がある。

「仲介者」社というのは、トルストイの高弟の1人ヴェー・チェルトコフ(В.Г. Чертков)によって、1884年に創設された出版社で、当時粗悪で貧弱な「行商文学」(呉服商などの行商人が民衆向けの廉価な本なども売り歩いていたことから名づけられた)に代って、「生きた文学を渴望している」農民や労働者などの民衆の要求にこたえ、真の民衆教化を目的とした。最初に出版されたのが、トルストイの民話『人は何によって生きているか』、

『コーカサスのとりこ』、『神は真理を見そなわす、されど直ちには<sup>のたま</sup>宣わじ』とエヌ・レスコーフ (Н. Ф. Лесков 1831~1895) の『ある百姓家に客となれるキリスト』の4編で、いずれもがまもなく数十版を重ねる売れ行きであった。その後、民話、伝説、諺、聖賢伝、偉人伝、短編小説、詩、読本、歴史や算数の教科書、絵画、等、さまざまなシリーズものなど出版活動の範囲を広げていった。

そこには、上記のレスコーフをはじめ当時の有名な作家、新進の作家や画家などが加わった。トルストイも、チュルトコフに、「民衆文学刊行の仕事は、ますます力強く私の心を捉えつつあります。50年の体験によって購うるものを、ここに支払いたいような気がします」<sup>15)</sup>と書き送り、熱烈に<sup>とよ</sup>参与し、『イワンのばか』(1885)をはじめ数多くの民話、教育的諺を刷りこんだ『啓』(1886)や有名な労作『一日一善』などを寄せた。

トルストイは、『芸術とはなにか』の中で、真の芸術とは「人類の進歩に寄与」し、「万人の、自然の労働環境にある大衆の要求を満足」させ、「宗教的な、キリスト教的な、万人にわかる感情」に立脚したもので、「万人に理解しうる」表現形式、つまり、「簡潔、単純、明確」でなければならない<sup>16)</sup>と主張したが、「仲介者」は、まさにこれをモットーとし、道徳的水準の高い民衆本位の出版活動をくり広げた。それは、またトルストイ主義を民衆のあいだに浸透させる役割を果たした。

トルストイの高弟で伝記作家で知られるペー・ビリュコフ (П. И. Билуков 1860~1930) は、『仲介者』の出版物は、この当時の内務当局の容赦ない厳しさにもかかわらず、ロシアの農民の理性と感情とに非常に新鮮な糧を与え、なおその上に、非常に容易な達し易い形式において発表されたので、それらの出版物の現われる所には、常に現在の社会組織に対する自覚ある批評的態度と、常にまず自己から出発するところの、その改造の試みとが、必ず始められるのであった<sup>17)</sup>と書いている。

また、クループスカヤは、『仲介者』の歴史的意義を次のように書いている。

「私は、1980年代の末に『仲介者』の活動がいかに大きな意義を有していたか理解している。『仲介者』は、労働者や農民大衆のあいだに両手いっぱいの知識の種子を蒔いた。80年代には、知識は、働くものにとって禁断の木の実であった。そしてそれゆえに、『仲介者』の出版物は、すべてのものの注意を惹きつけた。若者のあいだにそれは民衆文学の分野で働きたいという意欲を呼び起した。労働者大衆が、知は力であり、新しい生活の建設のために、それらで武装しなければならないということを理解するようになったこの時期に、『仲介者』の教化活動が好意をもって想起されるのである」<sup>18)</sup>

『仲介者』社には、大学生など若いインテリゲンツアたちが集い、その一室で検閲で発禁となったトルストイの著作が読まれ、また毎週木曜日に集会が開かれ、そこにトルストイも出席し、社会、宗教、道徳などさまざまな問題が話し合われた。トルストイの思想に惹かれた若者たちは、社会-奉仕活動、例えば、1891~1892年の大飢饉における農民救済事業(義損金募集、無料食堂の設置、薪炭・穀物・衣料原料の支給等)などに積極的に協力し、農民や労働者の中へ入ってトルストイ主義の伝播者となった。

ゴルブーフ-ポサードフ(詩人で、ポサードフはペンネーム)は、20歳頃からトル

ストイの宗教観・人生観に共鳴し、『さらばわれらなにをなすべきか』にたいする自然のこたえとして、設立後間もない『仲介者』でみずから望んで出版物の行商に歩き、1887年からペテルブルクに設けられた出版物の倉庫（ビリュエコフが支配人）の管理に従事した後、1889年編集者チュルトフの書記として働いた。1893年に、編集局がモスクワに移され、チュルトフは事業から退き、ビリュエコフとゴルブーフ-ポサードフの二人が編集の責任者となり、ビリュエコフは、この頃開始された有識者のための哲学叢書の出版にあたり<sup>19)</sup>、ゴルブーフは民衆向けの出版にあたった。

1897年に、ギリシャ正教会の聖霊否定の異端者として、チュルトコフが国外に追放され、ビリュエコフはリガ地方に追放されて官憲の監視下に置かれた<sup>20)</sup>。このため『仲介者』の事業すべてがゴルブーフ-ポサードフに任されることになったのである。

ゴルブーフ-ポサードフは、これ以後1935年まで38年間にわたって出版活動に従事した。民衆教化を目的とした民話などの出版と有識者のための哲学叢書の出版のほか次のものを新たに加えた。『村の暦』（《Сельский Календарь》1893～1914）、1900年から『村の経済』（《Деревенское Хозяйство》）と『農民の生活』（《Крестьянская Жизнь》）の農民向け雑誌。『児童と少年のための叢書』（1898～1935）すなわち、子どもの年齢別に3～5歳、5～9歳、9～12歳、12～15歳—幼児向けの絵本のたぐいから、少年向けにビクトル・ユーゴの小説の翻訳といったもの にいたるまで、グループの年齢に応じた内容の文庫本シリーズ。児童雑誌『灯台』（《Маяк》1909～1918）—絵や図解入りの、芸術性や科学性豊かな、子どもの興味をひく内容の月刊誌。教科書や読本シリーズ。そして、1904年から「自由主義教育叢書」（後に「新教育と子どもの保護の叢書」となる）を出版した。これは17のグループに分けられ、主なものは、「教育の一般的問題」、「新学校や幼稚園などの教育施設」、「教授の新しい方法」で、ほかは「幼児の研究」、「街角で子どもとの社会的・教育的仕事」、「手の労働」、「遊びと子どもの仕事」などとなっており、これらには、トルストイ、ヴェントツェリ、ゼレンコ、エリ・シュレーゲル（Л.К. Шлегер 1863～1942）などといったロシアの自由主義教育論者の論文や実践記録、また外国の新教育論者の論文の翻訳—F・ガンスベルク、H・シャーレルマン、L・グルリット、A・フェリエールなどの、各国の新学校や実験学校、数学や地理などの教授法の翻訳紹介等で、1914年のカタログで99点が出版されている<sup>21)</sup>。この教育シリーズの出版の過程で、教育雑誌の出版が構想され、1907年秋に『自由主義教育誌』の出版のはこびとなる。

### III

ゴルブーフ-ポサードフは、出版活動のかたわら、モスクワ大学に付設された「モスクワ教育学協会」（《Московское Педагогическое Общество》）の活動に参加していた。

「モスクワ教育学協会」は、歴史学者ペー・ヴィノグラードフ（П.Г. Виноградов 1854～1925、初代議長）と物理学者エヌ・ウモフ（Н.А. Умов 1846～1915）を中心にして設立され、当時の進歩的学者、インテリゲンツィアや教師などが加わり、教育制度の改革、学校や家庭や社会における教育上のさまざまな問題の改善を検討し、広く活動していった。

「モスクワ教育学協会」のなかに家庭教育問題部門—道徳教育委員会と家庭学校組織委員会から成る一が設けられており、ヴェントツェリとエム・クレチュコフスキー（M.M. Клечковский）が活動の中心となっていた。ここでゴルブーノフ・ポサードフと親交を持つようになり、それが「自由主義教育叢書」の出版の動機となり、ヴェントツェリの論文『いかにして自由主義学校を設立するか』、『自由主義学校のための闘い』とクレチュコフスキーの報告書『現代教育と新しい道』が教育シリーズの最初の出版物であった。彼らは、協会の会議に<sup>ソビエト</sup>声明文を提出している。それは、ロシアの学校の現状批判とともに、すべての教育機関を協会の手<sup>ソビエト</sup>に即座に移譲すること、精神のおよび肉体的苦痛や強制から子どもを護る方策を検討するための親と教師の全国大会を召集することを内容としていた。この声明文は、ゴルブーノフ・ポサードフによれば、「モスクワ教育学協会が閉鎖された原因のひとつ」となった<sup>22)</sup>。

家庭教育部門のメンバーは、彼らの思想の普及とその実現化のための拠り所をもとめた。そのひとつが『自由主義教育』誌であった。それについて、ゴルブーノフ・ポサードフは、「精神的な支えとなり、われわれにとって貴重な思想のための活動と闘争に結集し、実際の生活の中でそれらを実現させていくさいに組織的に援助してくれるような定期的な機関雑誌の必要性を痛感するようになった」と述懐している<sup>23)</sup>。

ゴルブーノフ・ポサードフは、また「モスクワ子どもの共同教育サークル」《Московский кружок совместного воспитания и образования детей》の首唱者のひとりでもあった。このサークルと教育学協会との関係はよくわからないが、そのメンバーが家庭教育部門のそれと大分重なっている。このサークルは、ヴェントツェリとチェーホフを中心とした自由主義教育論者たちの実践的研究サークルであった。まもなく教育観の対立が生じ、1905年の暮から1906年にかけての集会で、ヴェントツェリ支持のグループとチェーホフ支持のグループに分れた。前者は、「自由な子どもの家」《Дом свободного ребенка》—子どもの自由を絶対視し、学校<sup>ソビエト</sup>の概念そのものを否定して、徹底した自由主義教育の家庭的共同体を主張し、後者は、「自由主義学校」《Свободная школа》—子どもの自由の尊重を中心としながらも、教師の影響<sup>ソビエト</sup>力や組織的教育の必要性を主張した。前者には、クレチュコフスキーやゴルブーノフ・ポサードフたちが集まり、後者には、エム・スヴェンチーツカヤ（М. Х. Свентигцкая）、エム・ベレドニコフ（М. В. Бередников）、エム・ポチョムキン（М. И. Потемкин）、アー・コルモゴロフ（А. И. Колмогоров）などが集まった<sup>24)</sup>。

ヴェントツェリの支持者たちは、「自由な子どもの家」構想に従って、1906年モスクワに「学庭学校」《Семейная школа》を開設した。これは、5～10歳の児童を対象とし、児童と教師と親とから成る自治的教育生活共同体として組織され、児童の興味と要求の最優先、そして児童の興味に応じた、児童による自由な作業グループ化を基礎とした。なによりも創造的労働・作業に重点がおかれ、知的学習は二義的なものとなった。授業は、創造的労働・作業の過程で児童たちに生じるさまざまな疑問に教師が答え、それを解決していくという形で進められ、授業の時間割や生活の規則は、親も同席して作られた。しかし、こうした徹底した自由主義教育にたいして、やがて基礎的知識・学力や基本的しつけを求める親たちか



ら不満が起り、児童による自由な作業グループは学習グループ(クラス)になるなどに後退し、十分な成果をあげられないまま1909年に閉鎖された。ヴェントツェリは、「自由な子どもの家」の主張を変えることはなかった。ソビエト教育家エフ・コロレフ(Ф. Ф. Королев)によれば、ソビエト政権下1918~1920年にいくつかの学校コンミュン школы-коммуныと模範学校 опытно-показательные школы がヴェントツェリの理論に従って経営され、社会と国家からの教育の独立を説いた主著『子どもの教育の新しい道』《Новые пути воспитания и образования детей》(1913)は、1920年代末に物議をかもした「学校死滅論」《теория отмирания школы》の源となり、ソビエト教育学に「有害な影響」を与えた<sup>25)</sup>。

チェーホフのグループは、ペテルブルクに行つて「就学前教育促進協会」《Общество содействия дошкольному воспитанию》を組織し、金属工クラブと共同して、15の労働者のための幼児教育施設や、さらにその上の学校を設立するなど社会教育活動を展開し、その学校のいくつかは、1917年の革命後ナルコンプロスの模範学校に改組されていった。

共同教育サークルとは別に、シャツキーは、ゼレンコ(アメリカのセツルメントの影響を受けてシュレーゲルとともにモスクワ貧民街で奉仕・教育活動に従事していた)と共同して、1905年にモスクワ郊外に孤児を中心に「夏期児童労働コロニー」《Летняя детская трудовая колония》を創設し、また同年に「子どもクラブ」をつくり、さらに1906年に「セツルメント協会」《Общество Сеттльмента》を結成し、貧民の子弟や孤児の教化や社会奉仕活動を行っていた。なお、「セツルメント協会は、1908年政府によって閉鎖されたが、シャツキーは、1909年に「子どもの労働と休息」《Детский труд и отдых》協会を結成し、子どもクラブ、幼児の保育・教育施設、初等学校を開設するとともに、1911年に夏期労働コロニーを「元気な生活」《Бодрая жизнь》として再開した。

このように自由主義教論者などのプチブル・インテリゲンツィア層によって、第一次ロシア革命期以後、広汎な社会—教育的活動、教育改革要求や新しい教育的試みがいろいろみられるが、それらの機関雑誌的役割を果たしたのは、『自由主義教育』誌であった。

『自由主義教育』誌は、「自由主義教育、すなわち、自立性、子どもの自由な興味・要求の満足、および生活の不可欠な基礎としての生産的労働に基づいた、教育に関する諸問題の研究」を目的として<sup>26)</sup>、1907年、9月に発行された。創刊号に雑誌の協力者の一覧があるが、それを見ると57名が列挙されており、そこには、ヴェントツェリ、クレチコフスキー、ゴルブーノフ-ポサードフ、スベンチーツカヤ、ゼレンコ、シャツキーのほかに、ビリュコフやイー・ポポフ(Е. И. Попов)といったトルストイの高弟の名もあり、後になってチェーホフ、シュレーゲルなども加わった。

『自由主義教育』誌に掲載されているものを詳しく説明することはできないので、簡単に紹介しておく。

ヴェントツェリをはじめとする雑誌の協力者たちの論文はもとよりであるが、外国の新教育関係者の教育論文の翻訳や要約が多い。その名前だけあげれば、B・オッター、F・ガンスベルク、L・グルリット、E・ケイ、G・ケルシェンシュタイナー、H・シャーレルマン、J・デューイ、O・ドクロリー、E・ドモラン、J・バドレー、A・フェリエール、

セバスチャン・フォール (1858~1942), M・モンテッソーリ, W・ライ等である。そのうちでも, ガンスベルク, シャーレルマン, セバスチャン・フォールといったような共同体学校, 人格主義教育, 徹底した自由主義教育に関する論文や実践報告が際立って多いが, それは, これまで論じてきたことから明らかなように, トルストイの影響などもある。反学校的, 反組織化, 家庭的・自治的共同体の志向がロシアにあり, ガンスベルクなどがもっとも受け入れやすかったのではないかと考えられる。またロシアにおける実験学校などの実践報告, 例えば, 自由子どもの家の実践『モスクワにおける家庭学校の実験』(1907~1908, No.1), シャツキーのコロニーとセツルメントの活動『児童労働と新しい道』(1907~1908, No.6), シャツキーの妻ヴェー・シャツカヤ (В.Н. Шацкая 1882~1978) の元気な生活の実践『コロニーの一日』(1914~1915 No.7) 等, そしてオットー学校やシカゴ実験学校などの各国の実験学校や学校改革の動向といった外国教育事情の紹介が多くみられる。なかでも, ゼレンコは, 『現代の教育改革』と題して, 精力的に各国の新教育を中心とする教育改革への動きを紹介している—ドイツ (1911~1912, No.2, No.3, No.4, No.5, No.6, No.8), フランス (1911~1912, No.9, No.10), イギリス (1911~1912, No.11, No.12, 1912~1913, No.2, No.3), ベルギー (1912~1913, No.4, No.5), オランダ (1912~1913, No.6, 1913~1914, No.1), アメリカ (1913~1914 No.3)。ほかには, 国民教育, 家庭教育, 女子教育など各種教育集会の報告といった当時の教育問題に関する記事が掲載されている。そしてこの雑誌の最も特徴的なことは, くり返しになるが, トルストイに関する論文が多いことであり, トルストイの教育観—世界観の普及的役割を担っている観があるほどであるが, それはトルストイがロシアの新教育にたいして影響力をもっていたことの端的な現われでもある。

『自由主義教育』誌が教師のあいだでかなり購読され, 教育現場にだいぶ影響していたことは, 上述のように当局からの強い干渉によっても明らかであるが, 次にそのひとつの例として, ある農民教師の寄稿文をあげておく。

「私が, 雑誌を受けとるのをどれほど待ちわび, またどれほど興奮してそれにとびついたか, とても言葉では表わしきれぬものではありません。雑誌にざっと目を通しただけで, 私に新しい世界が開かれてきた。私はもう孤独ではなかった。どのページを見ても, 自由主義の, 創造に満ちあふれた教育の思想が泉のように湧き出ており, 私の心に熱烈な共感を引き起してくれる。私に特に深い印象を残してくれたのが, ゴルブーノフ—ポサードフの巻頭の論文であって, その中で彼は, 教師に新しい学校を描いてくれた」<sup>27)</sup>。

#### IV

トルストイは, 『自由主義教育』誌の刊行にはまったく関与していなかった。その頃トルストイは, ヤースナヤ・ポリャーナの自宅に在って, 農民の子どもを相手に学校を再開していた。「子どもたちの授業と, その準備とが私をすっかりとりこにしている」<sup>28)</sup>と1907年の日記にもあるように, 教育にたいする情熱は失われていなかったが, 1860年代の徹底した自由主義教育の実践とは大分性格を異にしており, 宗教—道徳的に傾斜してい

ることはトルストイ主義の本質からいって必然的であった。

当時、訪問者の一人は、トルストイの授業を参観して次のように書いている。

「それらの授業は、彼が子どもたちに向って福音書のどこかを話して聞かせ、その後で、彼らにそれをくり返えさせるというふうになっていた。この授業の目的は、第一に、もしこういう言い現し方ができるならば、子どもたちに宗教を教えることであった。それから第二に、子どもら自身の復唱によって福音書を編纂することであった」<sup>29)</sup>。

トルストイは、『自由主義教育』誌に関与しなかったが、それでも自ら5編の論文や書簡を寄せている（ゴルブーノフ・ポサードフの依頼によるものかどうか定かではない）。すなわち、『道徳的教育について子どもとの対話』（1907～1908 No.1）、『宗教教育について—アメリカ婦人への手紙』（1908～1909 No.12）、『教育について—ブルガーコフの手紙への回答—』（1909～1910 No.2）、『教師の主要な任務は何にあるか—民衆教師との対話から』（1909～1910 No.3）、『いつわりの科学』（1910～1911 No.6、トルストイの死後に掲載されたもの）である。

これらのトルストイの晩年の論文は、その当時の実践にも似たように、宗教的・道徳教育論的性格が前面に出ている。

ビリュエコフは、1880年代の末に、トルストイ主義と「仲介者」に集まったプチブル・インテリゲンツィア層との関わりに次のように書いている。

「トルストイの内部には、その一面に、民衆擁護と、アナーキズムの色彩を帯びた政治的方面の思索家とが、また一面には、あらゆる偏見妄信から掃き清められた、新しい宗教の道を探究する哲学者兼道徳家が共同生活を営んでいた」のであり、「トルストイの所へ集合するのを常とした我々のサークルの属しているのは、民衆的なそれ（註：トルストイズム）と名づけることができた。他の一つはむしろ宗教的なそれであった。」<sup>30)</sup>

このようにトルストイが、プチブル・インテリゲンツィアをはじめ、ロシアに及ぼした影響は一様ではなかった。そしてトルストイ自身は、「その宗教的哲学的思想を、一番大切なものに思っていた。民衆擁護の見解および政治上の見解は、彼においては、その宗教的世界観から流れ出るにすぎなかった」<sup>30)</sup>ものとなり、その宗教的世界観＝トルストイ主義の完成に全力を傾注していたのが晩年のトルストイであった。

ロシアの新教育とトルストイとの関係についていえば、プチブル・インテリゲンツィアたちは、特にヴェントツェリやシャツキーなどは、晩年のトルストイの教育観に啓発されたというのではなく、「民衆擁護と、アナーキズムの色彩を帯びた政治的方面の思索家」が胎動していた若い時分の教育実践と理論、すなわち1860～1870年代のヤースナヤ・ポリャーナ学校を中心とした教育実践や教育的著作により強く感化され、触発され、これらにあるべき学校のひな型や教育の理念を見出し、新教育に関わっていった。もっとも、トルストイの宗教・道徳観にも強く影響され、いわゆるトルストイ主義の立場から新教育を展開しようとしたプチブル層も少なくない。例えばゴルブーノフ・ポサードフの『エリ・エヌ・トルストイは教育の問題の解決に何をもたらしたか』（1907～1908, No.12）、エス・ドルィリン（С.Н. Дурьлин）の『学校教師としてのトルストイ』（1910～1911,

No.6), イー・ソロヴィエフ (И. Соловьев) の『エリ・エヌ・トルストイと子どもの創造的関心』(1912~1913) No.3) などの論文である。

ゴルブーノフ-ポサードフは、とりわけ熱心にトルストイの教育思想の普及に努めた。彼は、上記の論文の次に、『エリ・トルストイの教育にかんするすぐれた思想』を掲載している。これは、実に56ページにもわたって、トルストイの教育的著作からの抜萃したもので、「教育の唯一の規範は自由であり、唯一の方法は自由である」(『国民教育論』1862年からの抜萃)から始まって、6つの章一、1. 教育のいつわりの道と正しい道、2. 学校における自由と強制、3. 公平と罰、4. 教育と人格の調和的発達、5. 教授と教育の思想から、6. 精神的教育、に再構成したものである。また彼は、論文「エリ・エヌ・トルストイの教師にたいする一般的指針』はいつ、どのようにして現われたか」(1911~1912 No.12)の次に、『教師にたいする一般的指針』(1872年の初等教科書『アズブカ』—4分冊一の第一分冊の末尾に掲載された)をそのまま全文を掲載して、このトルストイの教師論に従って、教育と生徒への教師の愛、教師の自己研さん、教師と生徒との自然な関係による自由主義的教育の必要性を主張した。

ゴルブーノフ-ポサードフは、『自由主義教育』誌創刊号の巻頭文『序言』で次のように新しい教育を論じている。

「われわれの学校の上には、いまだに、‘子どものための学校ではなく、学校のための子ども’と書かれた旗が、ますます不気味にひるがえっている。…まだか弱い幼い人間にとって有害な学校の強制の気配の中で、子どもの独創性も、想像力も、観察力も、創意する力も、しおれてしまい、死んでしまっている」と、当時の学校を痛烈に非難し、それに代る新しい学校を主張する。新しい学校、それは、「自由な労働・作業の場となり、子どもたちと、子どもたちの自由な興味を満足させ、彼らの知識欲や創造欲を満足させることに助力してやりたいと望んでいる人々、この両者のあいだの自由な共同生活場となるだろう」、従って、「新しい学校には、子どもにたいするいかなる拘束も強制も存在しないだろう」し、そこではすべての基本に「愛、そして大人の人格にたいするのとまったく等しく、子どもの人格にたいする深い尊敬、とが置かれ」「なににもまして、子どもの精神の自由な発現、子どもの知性の自主的活動が尊重される」のである。そしてそこでは、「書物を学ばせることではなく、直接手による知識、生きた書物—自然の書物、つまり生活を読解することを学ばせる」のである。「われわれは、子どもたちと、盲従する奴隷にすることではなく、自覚的な、自由な人間となり、あらゆる人々と共に、生々とした、活動的な兄弟愛・協調の心で結ばれ、仲間のために献身し、自制することができる人間とすることを望んで」いる。しかし、これは「望むだけでは足りない」のであって、「現実生活の中に実現させるために努力すること」、「教育の根幹的改革に関わる問題を研究すること」が必要である。「新しい道が必要である。とはいえ、それはすでに新しいとはいえない方向」である。なぜなら、新しい方向は、すでにソクラテス、ルソー、そしてトルストイによって与えられている。なかでもトルストイは、新しい方向を「指示してくれただけではなく、新しい学校、新しい教育、すなわち、生徒の自由な欲求を満足させ、自由な表現のための

条件を整備し、子どもの精神的本質の発達や創造的能力に基づいた学校と教育を、現実生活の中に、初めて実現したのである」<sup>32)</sup>。

こうしたゴルブーフ-ポサードフの自由主義教育論には、トルストイの教育観を明瞭に反映していることがわかる。

最後に、トルストイの晩年の宗教・道徳的教育観と自由主義教育論との矛盾について言及しておく必要がある。

かつてトルストイは、論文『訓育と教育』(1862)の中で、教育の概念を訓育と教育とに分け、「訓育とは、われわれにとって善人だと思われるような人間を形成する目的で、ある人間が他の人間にたいする拘束的、強制的な働きかけである。一方教育とは、知識を獲得しようとするある人間の要求と、自分がすでに獲得した知識とを伝達しようとする他の人間の要求とを基礎とする。両者の自由な関係である」「訓育は強制的教育のことであり、教育は本来自由である」<sup>33)</sup>と定義し、彼は自由主義教育論を、訓育を排除することを基本に、展開していた。ところが、晩年の宗教・道徳への傾斜の結果、「善人だと思われる人間を形成する」ことを目的としたまさに訓育作用が、教育の中心になっていった。こうした教育観の矛盾、食い違いの説明を求めたのが友人ブルガーコフの手紙であり、それにたいするトルストイの返事が、『教育について』(1909~1910 No.2)である。その中でトルストイは、訓育と教育の区別は不自然で、区別することはできないことを認め、「自由こそが、教師にとっても、生徒にとっても、すべての真の教育の絶対的条件である」ことをくり返し主張する。しかし、「自由に基ついた教育が、教師にも生徒にも、勝手きままに、思いつくままに選ばれた、不必要な、不適切な時期に与えられたりする、有害な知識の寄せ集めとならないようにするため」には、教師と生徒の両方の共通の基盤として、「いつも存在したし、存在しうるものは、教師にも、生徒にも、またすべての人にも、同じように自由に認識されている人間生活の意義および使命の観念、つまり宗教的観念以外にはありません」と、訓育的作用、つまり、宗教を教育の根底としなければならないし、それは自由主義の教育とは矛盾するものではないとした。

こうしたトルストイの宗教・道徳を根本とする見解は、自由主義教育とは本質的に相容れるものではないと批判したのが、ヴェントツェリであった。

ゴルブーフ-ポサードフが、「私は、自分の立場から…教育から宗教のあらゆる要素を排除することは理に適ったものとはまったく認めることはできない。それどころか反対に、私は、教育においてこの上なく大きな意義を正に宗教的要素に与える」<sup>33)</sup>ものであるとしたことに鋭く対立し、ヴェントツェリは、子ども自身が自分の宗教を見いだすべきで、子どもになんらかの観念を植えつける権利を大人に認めることは、自由主義教育論者ではないと反駁した。ヴェントツェリは、論文『道徳教育と自由』《Нравственное воспитание и свобода》(1908~1909 No.4)の中で次のように主張した。

「道徳教育の目的は、‘善の暗示’、すなわち、子どもの中に純粹に不随意的性質の他人の心理的過程の模倣によって、われわれの道徳的最高目的を植えつけることではなく、子どもの中に、自主的な自由な道徳的意志と自律的な道徳的観念とを覚醒させることであ

る。そのためには、われわれの道徳的最高目的は、ただの素材として存在するだけである」<sup>35)</sup>。

ヴェントツェリは、さらに論文『教育の基礎は何にあるか』(《В чем основа воспитания и образования》)を書き、トルストイは、「粗暴な強制を否定しながら、その場所にデリケートな強制を置いた」、また「外面的な隷属から解放しながら、同時に目に見えない隷属の鎖で縛っている」として、トルストイは晩年に自由主義教育論から離脱したと批判した<sup>36)</sup>。この論文はトルストイを冒とくするものであると、ゴルブーノフ-ポサードフは、『自由主義教育』誌に掲載することを拒絶した。そのためこの論文は、『ロシアの学校』誌に掲載されたのであった。

なお、ヴェントツェリの論文が『自由主義教育』誌に再び現われるのは、トルストイの死後の1912年2月号(1911~1912 No.6)になってからであった。

## 註

- 1) 岩間徹編 ロシア史 山川出版 1981 p.350.
- 2) В.И. Волков Из истории педагогической Мысли в России в период революций 1905-1907 гг. 《Советская Педагогика》 1955 No.6 стр. 84-85.
- 3) 『自由主義教育』誌は、1907年9月に創刊、1917年9月から『自由主義教育と自由主義学校』、1918年2月から『自由主義教育と自由主義労働学校』に改称。
- 4) Ф.С. Озерская Журнал 《Свободное Воспитание》, 《Советская Педагогика》, 1972 No.6 стр. 114.
- 5) Там же см. стр. 115-122.
- 6) 4編『スイスの学校について(個人的印象)』、『作文をいかに教えるか』とジャーレルマンの翻訳2編一は掲載されなかった。
- 7) Н.К. Крупская Педагогические Сочинения том 11 стр. 255.
- 8) Там же.
- 9) Там же Журнал 《Свободное Воспитание》 стр. 115.
- 10) Там же.
- 11) ソ連科学アカデミー 岡本 哲, 石黒寛訳 ロシア近代文化史 ミネルヴァ書房 昭47 p.230.
- 12) 川野辺 敏・海老原治善編 現代に生きる教育思想6 ロシア・ソビエト ぎょうせい 昭56 292-293.
- 13) См. Ф.Ф. Королев К.Н. Вентцель-виднейший представитель теорий свободного воспитания 《Советская Педагогика》 1964 No.4 стр. 75.
- 14) Н.В. Чехов, И.И. Горбунов-Посадов и его педагогическая деятельность 《Советская Педагогика》 1941 No.2 стр. 73.
- 15) ビリュエコフ 原久一郎訳 大トルストイ伝II 勁草書房 1968 p.140.
- 16) 中村 融訳 トルストイ全集17 芸術論・教育論 河出書房新社 昭51 pp.121-128.
- 17) 前掲書 大トルストイ伝II p.472.
- 18) 同上 p.442参照.
- 19) 当時激しくなった宗教的迫害にたいしてトルストイは、皇帝ニコライ二世に抗議の手紙を送り、またを救済に奔走するが、1901年彼自身ギリシャ正教会から破門され、ロシア中に大センセーションを引き起した。
- 20) Там же Н.К. Крупская Педагогические Сочинения том 11 стр. 255.
- 21) Там же Горбунов-Посадов и его педагогическая деятельность стр. 76.
- 22) 「モスクワ教育学協会」は、1908年に政府によって閉鎖されるが、その主因は、1905~1907年第1次革命期に、協会の主導力がボリシェヴィキのイー・ステパーノフ-スクヴォルツォフ、

エム・ボクロフスキーなどの手に移り、反政府的・革命宣伝の機関として機能していたことによる。

- 23) Там же Журнал «Свободное Воспитание» стр. 115.
- 24) См. И.И. Горбунов-Посадов и его педагогическая деятельность стр. 80.
- 25) См. К.Н. Вентцель-виднейший представитель и теории свободного воспитания стр. 78.
- 26) «Свободное Воспитание» 1907-1908 No.1 стр. 1.
- 27) См. И.И. Горбунов-Посадов и его педагогическая деятельность стр. 77.
- 28) 前掲書 大トルストイ伝Ⅲ p.186.
- 29) 同上 p.185.
- 30) 同上 pp.268~269.
- 31) 同上 p.268.
- 32) См. «Свободное Воспитание» 1907-1908 стр. 4-10.
- 33) Лев. Толстой Педагогические сочинения Москва 1953 стр. 242.
- 34) «Свободное Воспитание» 1907-1908. No. 10 стр. 112-113.
- 35) «Свободное Воспитание» 1908-1909 No. 4 стр. 52.
- 36) См. К.Н. Вентцель-виднейший представитель теории свободного воспитания стр. 79.